

海外留学に対するイメージ及び意識の変化

—韓国語学研修参加者の場合—

池田 庸子

要 旨

本研究では2013年8月に韓国仁済大学校で実施された3週間の夏期語学研修に参加した学生4名にPAC分析(Personal Attitude Construct:個人別態度構造分析)を行い、海外留学に対するイメージ及び意識の変化に関する調査を行った。複数の学生に共通する項目を検証した結果、以下のようないメージ及び留学前後での意識の変化が観察された。(1)日本とは異なる文化の中で生活するという異文化体験に大きな意義を感じている、(2)韓国語を学びたいと思う気持ちがより一層強まった学生がいる一方で、留学において言語を重視しないという意見も見られる、(3)留学経験を自分自身の成長の場であると捉えている、(4)留学後に留学自体に対する不安よりも、むしろ単位や就職活動など留学制度や帰国後の状況に対する不安が高まっている。

【キーワード】 イメージ、海外留学、異文化、PAC分析

1. はじめに

近年、グローバル人材育成の重要性について、政治、経済、教育等、様々な分野で語られることが多くなってきている。リクルートが大学進学者に対して行った調査(2011)によると、大学進学者の32.8%が「留学意向あり」と回答しており、近年海外留学に対する関心が急速に高まっていることが窺える。しかしながら、留学費用、語学力、卒業時期の遅れ、就職活動時期との重複など、学生にとって障壁となる課題が多く残されていることも実情である。このような状況において、長期留学に比べて、経済的負担も軽く、語学要件も緩やかで、長期休暇を利用して参加できる数週間の短期研修の需要は高まっており、多くの大学で数週間の海外研修を実施している。留学や語学研修が短期化するにつれ、数週間という短時間で実際にどのような効果があるのか、学生にどのような学問的、人間的な成長をもたらすのかといった研修の成果について様々な手法で検証することが益々重要となっている。

海外留学・研修の学術的成果や教育的価値を検証する研究として、足立(2010)は、留学の成果を(1)学問・学術的学び、(2)外国語運用能力の獲得、(3)異文化適応能力の

獲得、(4) 人間的成長、の4つに分類して、その教育的価値を検証している。短期語学研修に関する研究でも同様に、学術的（語学力）な面や、情意的な面でどのような変化がみられたか検証されている。木村（2011）は3-4週間の短期研修参加者を対象に英語力の向上について、テストにより検証したところ、特にリスニング力に関して優位な伸びが認められたと報告している。さらに学習ストラテジーの使用度も高くなっており、英語学習に対してより自律性を身に付けたのではないかと述べている。久野（2011）の研究でも語彙、文法、読解能力には優位な差はみられなかったものの、聴解能力においてプラスに向上したことが報告されている。中川（2009）は短期研修参加者を対象にPAC分析を行い、研修参加者が認知、情動、態度、行動などの面でどのような気づきを獲得し、変化したかを考察している。松田（2012）は11-13日間の短期海外研修参加者を対象に学生の自己評価に関するアンケート調査を行った結果、ほとんどの学生が英語力にいい影響があったと評価していることと、積極性・自立性・社交性・探究心・努力・気配りなどの面で成長を自覚していることを報告している。

短期研修は長期に比べて経済的負担が軽いとはいうものの、数十万の費用が必要であり、学生にとっては大きな決断となる。かかる時間的・経済的コストが留学によって得られる成果に見合っているかどうか主催する大学として、十分に検証することが必要である。久野（2011）が指摘するように、本当に有効な効果があるのかという疑問に説得力のある回答をすることは、研修を勧める教育機関の責務と言えるであろう。本稿では2013年8月に韓国仁済大学校で実施された3週間の韓国語研修に参加した学生を対象に内藤（1993）が開発したPAC分析（個人別態度構造分析）を用いて調査を行い、研修参加後にどのような意識やイメージの変化があったか検証する。

2. 調査の方法

PAC分析では、刺激語と呼ばれる文章をもとに被調査者に自由に連想してもらう。内藤（2002）の定義によると、PAC分析は、「当該テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、当人によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、研究者による総合的解釈を通じて個人別にイメージ構造を分析する方法」である。調査者によってあらかじめ用意された質問に答えていくアンケート調査とは異なり、被調査者自身の連想から出た項目を被調査者が自ら解釈していくために、「無意識（少なくとも前意識）まで踏み込んだ構造を解釈（明確化）させることになる」（内藤1993）と

されている。今回の刺激語は「あなたは海外で生活したり、海外へ留学したりすることに対してどんなイメージを持っていますか」という内容である。紙面の関係上、具体的な PAC 分析の手順は省略する。

被調査者は、2013 年度の韓国仁済大学校で 3 週間の夏期研修に参加した学生 4 名で、調査は帰国直後の 2013 年の 8 月から 9 月にかけて行った。この研修は、韓国仁済大学校が日本の協定大学のために実施する韓国語・韓国文化プログラムで、参加者は全員日本人学生である。滞在中は大学の寮に宿泊し、研修期間中チューターとして日本語が話せる現地学生がきめ細かいサポートを行っている。参加者は韓国語初級レベルである。

3. 調査の結果

まず、それぞれの被調査者の属性を示し、次にクラスター分析の結果と被調査者自身による解釈の概略を示したうえで、留学前後の変化について述べる。

3. 1 学生 A の結果

学生 A の個人属性は次の通りである。①性別：女、②年齢：10 代、③韓国語研修以外の海外経験：あり（オーストラリア 2 週間、韓国 3 日間）、④留学前の外国人との接触：たまにある、⑤研修期間中の現地の人との交流：よくあった。

学生 A のクラスター分析の結果を図 1 に示す。学生 A は自由連想で 12 項目を挙げている。左の数字は重要度を示しており、1)「国際交流」が被調査者にとって最も重要な項目である。左端の+、-、0 は被調査者による評価（+：肯定的、-：否定的、0：どちらでもない）を示している。

学生 A はデンドログラムを 3 つのクラスター（まとめ）に分類して解釈した。クラスター①は「国際交流」「異文化交流」「日本語以外の言語の習得」の 3 項目で、共通するイメージは《理解と交流》である。学生 A 自身にこれらがどのようなイメージでまとまっているか解釈してもらったところ、交流は学校外で起こることで、自分と違うもの、自分が今まで持っていたもの以外と出会ったり、習ったりする。また、言語の習得に関しても、本当の発音とか実際に使われている言葉づかいは現地に行かないと教科書では教えてくれないので、行ったほうが早いと述べている。

クラスター②は「楽しそう」「日本国内では体験できないことができる」「日本では感じられないワクワクを体験できる」「友人が多くできる」「自分が多数側から少数側になる」の 5 項目で、共通するイメージは《楽しいこと》である。これらは日本では体験できない

ことで、国内では体験できない自由もある。国内では体験できないという点では、クラスター①とも共通するところがある。

クラスター③は「大変そう」「単位を取るのが大変」「お金がかかる」「少数の人が行うこと」までの4項目で、共通するイメージは《大変なこと》である。これらは、研修中に長期留学している先輩から聞いた情報に基づくイメージで、留学中に単位があまり取れない、教職や他の資格を取ろうとすると4年では卒業できない、お金の送金に時間がかかって困っているなど、具体的な状況について先輩から聞いたといい、単位とお金は大学生にとっては大きなことなので、この二つがあるから留学は少数の人が行うことだと思ったと説明している。

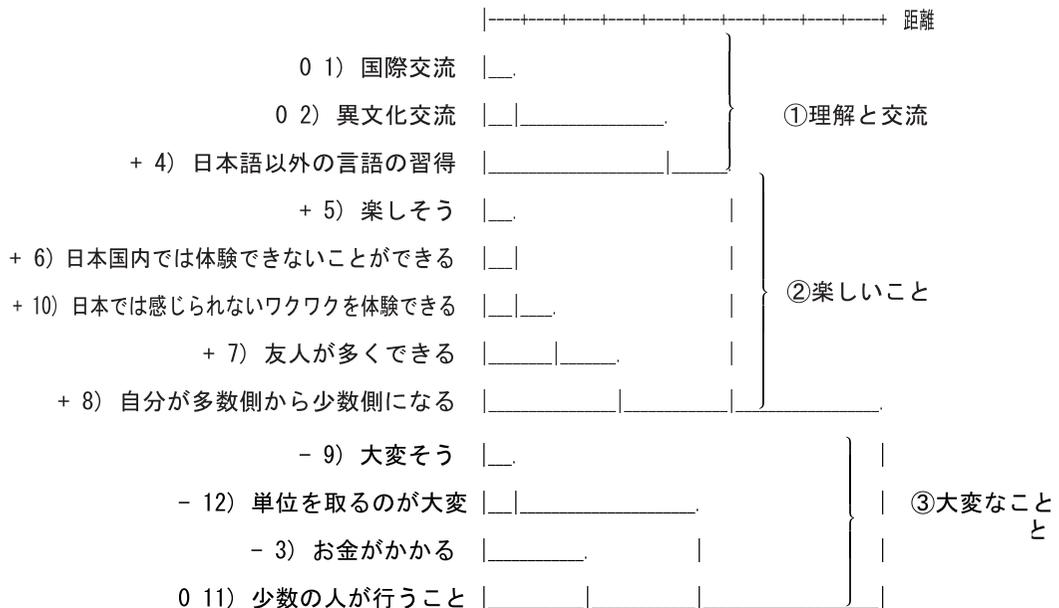


図1 被験者Aのデンドログラム

研修の前後で変化したイメージについては、最も大きな変化がクラスター③で、先輩から話を聞く前は、もっと単位を取るのは大変じゃないと思っていたけど、朝鮮語と体育以外の単位はなかなか取れないと聞いて、大変だと思った。クラスター①に関しては異文化交流がもっとしたくなった。もっと韓国語を話したいとか、もう一回韓国行きたい、今度は日本を紹介したい、異文化交流をしたいという考えが強くなった。自分のことを知らないことに気がついて、同時に相手のことも知りたいと思うようになった。また、多数派

から少数派になることでこんなに環境が変わるものだとわかった。隣の国だし、生活水準的には日本と変わらないところでも、こんなに違うんだと研修の前後で大きな意識の変化があったと述べている。

3. 2 学生 B の結果

学生 B の個人属性は次の通りである。①性別：女、②年齢：10 代、③韓国語研修以外の海外経験：特になし、④留学前の外国人との接触：よくある、⑤研修期間中の現地の人との交流：よくあった。

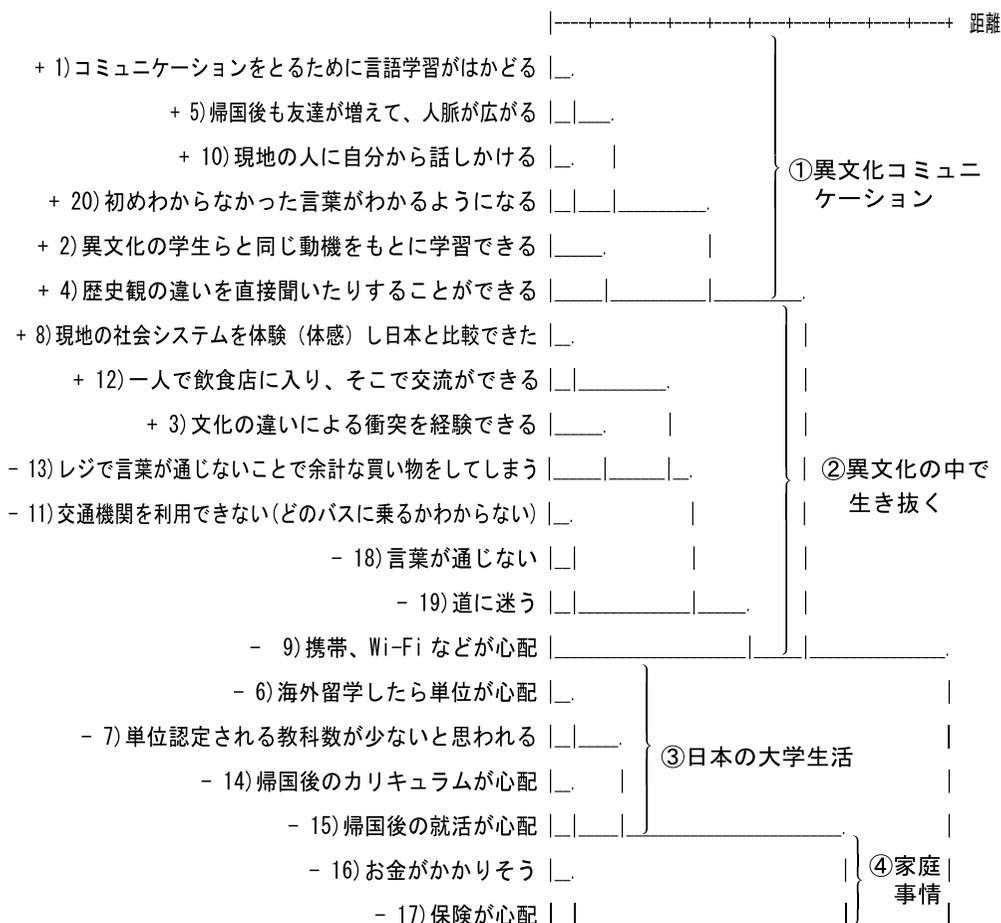


図 2 被験者 B のデンドログラム

学生 B のクラスター分析の結果を図 2 に示す。学生 B のデンドログラムは 20 項目で、4 つのクラスターに分類した。クラスター①が、「コミュニケーションをとるために言語学習がはかどる」「帰国後も友達が増えて、人脈が広がる」「現地の人に自分から話しかける」

「初めわからなかった言葉がわかるようになる」「異文化の学生らと同じ動機をもとに学習できる」「歴史観の違いを直接聞いたりすることができる」までの6項目で、これら6項目に共通するイメージは《異文化コミュニケーション》である。今まで培ったコミュニケーション能力が生かせる場であり、自分から話しかけないと何も起こらない、自分で言語習得しないと友達もできない。留学の最終目標はこの辺りにある。

クラスター②は「現地の社会システムを体験（体感）し日本と比較できた」「一人で飲食店に入り、そこで交流ができる」「文化の違いによる衝突を経験できる」「レジで言葉が通じないことで余計な買い物をしてしまう」「交通機関を利用できない(どのバスに乗るかわからない)」「言葉が通じない」「道に迷う」「携帯、Wi-Fiなどが心配」の8項目で、共通するイメージは《異文化の中で生き抜く》である。生活する上で、積極的にやらないと生活できない。わからないままに済ませないで、「これはどういう意味ですか」と聞くと、相手の人が優しくなって教えてくれて、そこで交流できた感じがすると説明している。

クラスター③は「海外留学したら単位が心配」「単位認定される教科数が少ないと思われる」「帰国後のカリキュラムが心配」「帰国後の就活が心配」の4項目で、共通するイメージは《日本の大学生活》である。学生Aと同様、留学中の先輩から具体的な話を聞いて、留学に対して心配になったと述べている。

クラスター④は「お金がかかりそう」「保険が心配」の2項目で、イメージは《家庭事情》である。留学中日本のアパートを解約するのかそのままにしておくか、保険はどうするかなどかなり具体的に考えたことがイメージとなっている。

留学前後の変化について、クラスター①に関しては、留学前は、言語は自然と身につくだろうと考えていたが、ちゃんと言葉を勉強していかないとコミュニケーションがとれないと実感できた。留学したい気持ちは前からあったけど、さらに強まった。韓国語をもっといっぱいやろうと思った。クラスター②に関しては、あまりカルチャーショックもなく、むしろ物足りない感じがした。クラスター③に関しては、前は心配していなかったが、留学して（先輩に話を聞いて）心配になった。就活も3年生で留学したらでしてくれるんだと思ったと述べている。

3. 3 学生Cの結果

学生Cの個人属性は次の通りである。①性別：女、②年齢：20代、③韓国語研修以外の海外経験：あり（カナダ1か月、中国2か月）、④留学前の外国人との接触：たまにある、⑤研修期間中の現地の人との交流：たまにあった。

学生Cのクラスター分析の結果を図3に示す。

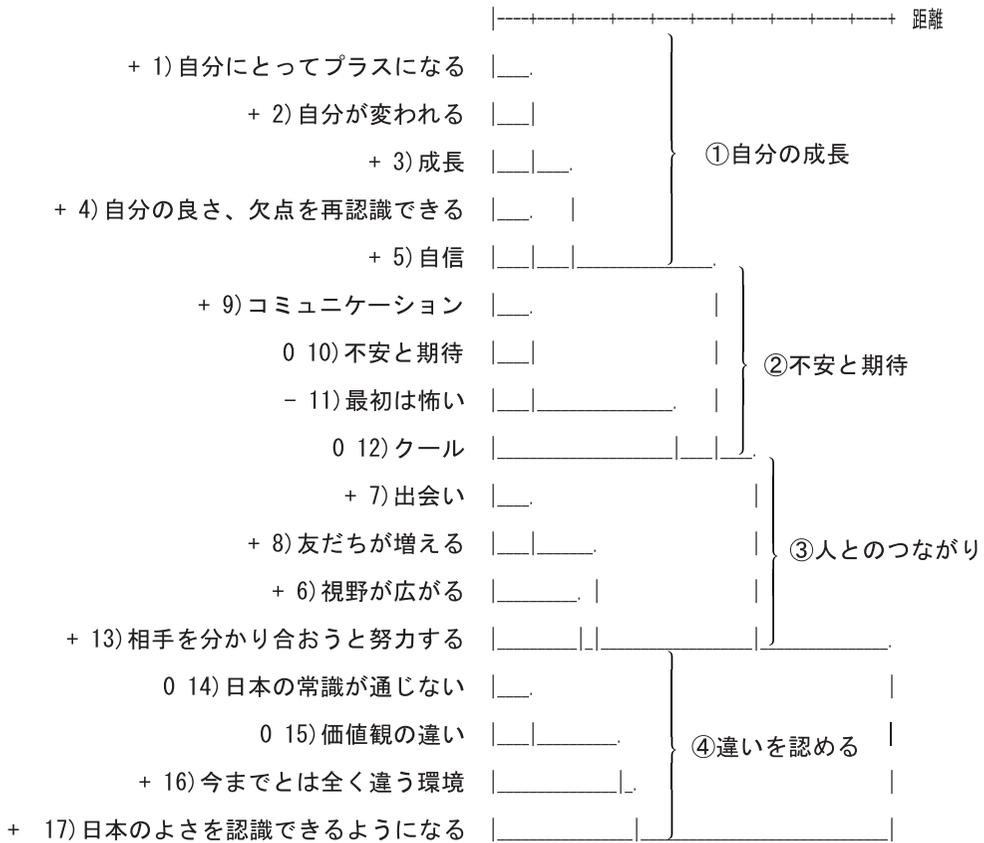


図3 被験者Cのデンドログラム

学生Cのデンドグラムは17項目で、4つのクラスターに分類した。クラスター①は「自分にとってプラスになる」「自分が変わる」「成長」「自分の良さ、欠点を再認識できる」「自信」の5項目で、共通するイメージは《自分の成長》である。日本と違う環境に行くと、今まで全く知らなかった人と関わりをもつことになるので、今まではわからなかった自分のよさや直したいところ、新たな自分、そういうものを留学では見つけられると述べている。

クラスター②は「コミュニケーション」「不安と期待」「最初は怖い」「クール」の4項目で、イメージは《不安と期待》である。今までとは違う環境に行くから、不安とか、最初は怖いなど思うのが実際だろうし、成長プラスそういうものもついてくるものと述べている。

クラスター③は「出会い」「友だちが増える」「視野が広がる」「相手を分かり合おうと

努力する」の4項目で、イメージは《人とのつながり》である。フェイスブックとかスマートフォンの中だけでつながるよりは、現地に行って、会話とかコミュニケーションを取って、本当に心から仲良くなるとかそういう出会いの方が好きなので、本当の友だち関係を期待している。

クラスター④は「日本の常識が通じない」「価値観の違い」「今までとは全く違う環境」「日本のよさを認識できるようになる」の4項目で共通するイメージは《違いを認める》である。日本の常識で留学すると、日本はこうなのになんでこの国はこうじゃないのの？ びっくりすることもあると思うが、違うことって大事で、違うこともいいことだと思えるようになったと説明した。

留学前後の変化について聞いた。クラスター①の自分の成長に関しては、いままで日本人的なあいまいさがいいと思っていて、人間関係に関しても距離を保っていきのいいと思っていた。でも、韓国人は日本人と違い積極的で、人との距離の縮め方も違う、自分を知りたくてそう言ってきてくれるのを知って、それがうれしいことに気づいた。韓国のいいところを取り入れて、今までのコミュニケーションの取り方を変えたいと思うようになった。②に関する変化は大学で3回研修に参加してきたので、3回目になると不安はほとんどなくなって、楽しみや期待のほうが大きくなったと述べている。③にかんしては、もともと自分から積極的に友だちを作りにつかない性格だったが、留学を通して自分から行動するように少しずつ変わったと述べている。④に関しては、その国に行って、現地の人と生活してみるとだんだんその国に合わせようかと思うようになったという。

3. 4 学生Dの結果

学生Dの個人属性は次の通りである。①性別：男、②年齢：10代、③韓国語研修以外の海外経験：あり（韓国1か月、ヨーロッパ、アフガニスタンなど短期）、④留学前の外国人との接触：よくある、⑤研修期間中の現地の人との交流：よくあった。

学生Dのクラスター分析の結果を図4に示す。

学生Dのデンドグラムは11項目で、4つのクラスターに分類した。クラスター①は「未知の世界を体験する」「カルチャーショック」「相手の国を知る」「日本文化を再認識する」「自国と他国を比較する」の5項目で、共通するイメージは《留学の意義》である。日本に住んでいると意外と日本のことが分からない。この部分は韓国のほうがよくて、日本はだめだなとかその逆とか、留学したから韓国に関しても日本に関しても知らないことを知ることができたと述べている。

クラスター②は「見識を広める」「相互点・共通点を見つける」「ステレオタイプを崩す」「共通の価値観を形成する」の4項目で、共通するイメージは「留学で得られるもの」である。異文化は文化的な差異について取り上げられることが多いが、反対に共通点もあるので、共通した点についてもう少し考えたほうがいいのかと思う。

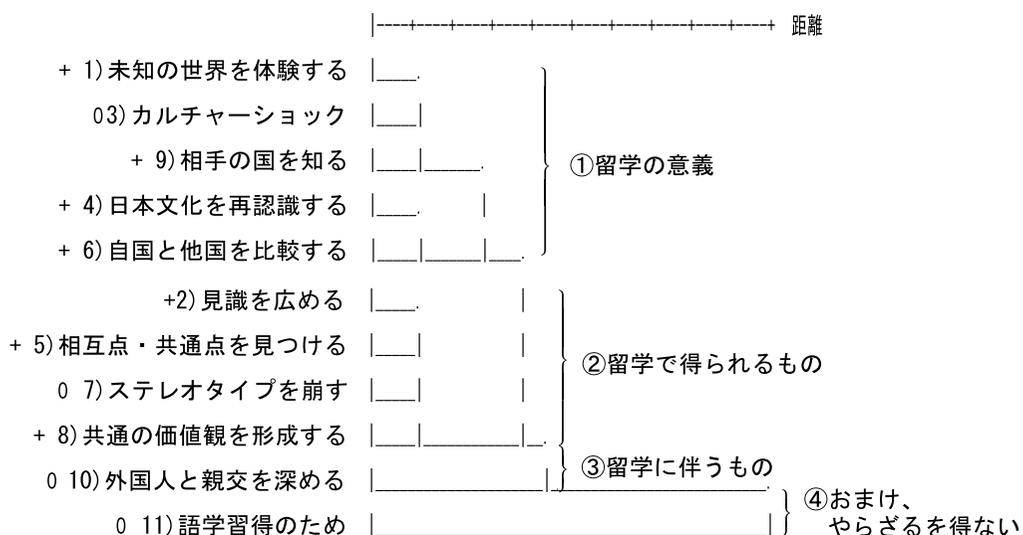


図4 被験者Dのデンドログラム

クラスター③は「外国人と親交を深める」の1項目で、イメージは「留学に伴うもの」である。日本の大学にも留学生はいて、交流できるが、現地の外国人と触れ合う方が新鮮、留学の目的ではないけれど、留学をすることによって同時に親交も深まると述べている。

クラスター④は「語学習得のため」の1項目で、イメージは「おまけ、やらざるを得ない」である。留学イコール語学留学っていうのは間違っているんじゃないかと思う。留学は語学のためじゃなくて、自分の見方を広げるとか、自分自身が成長できる、そういう違う環境に身を置くことをするためのものだと思っている。もちろん外国語の勉強は必要だが、一番重要度が低い。仮に語学ができなくても文化的差異は経験できると説明している。

留学前後の変化に関しては、日本と違うところを知ることができたというのが一番大きいかもしれない。日本との差異を再認識して、日本に帰ってきてからも韓国ではこうだったなと思い返したりするようになった。そういう視点を自分が持てて、比較するようになった、というのは一番変わったこと。クラスター②に関しては、日本と韓国は似ているところもあるので、カルチャーショックは少なく、大枠は同じかなと思う感じがした。違い

ばかりじゃなくて、同じ点に目を向けて言うことが大事だと感じた。クラスター③に関しては、実際に友だちが増えた。クラスター④に関しては、留学中の経験から、せめて生活するのに必要な最低限は必要だと感じた。もともと外国語の勉強は好きだったが、もうちょっと頑張ろうという意識に変わった。

4. 調査の考察

以上の結果から、特徴的と思われる項目について考察を述べる。

4. 1. 異文化体験に関して

全員に共通して言えるのが、異文化で生活するというところに大きな意義を見出していることである。学生 A は「国際交流」「異文化交流」が最も重要な項目であり、インタビューでも自分と違うものとの出会いが印象深く、日本では体験できないことが体験できること、異文化交流をしたいという気持ちが強まったと述べている。学生 B も異文化体験に関する記述が多く、最も項目数が多いクラスター②を「異文化の中で生き抜く」としていることから窺えるように、道に迷ったり、買い物で困ったりという日本での日常生活では遭遇しないような経験を通じて、自分から積極的に動くことの重要性を感じている。学生 C も同様に、今までとは全く違う環境に身を置くことで、価値観の違いを認識し、もっと積極的に自分から行動するようになったと意識の変化があった。学生 D はさらに、「未知の世界を体験すること」など、実際に海外で生活して相手と自国の文化を相対的に見られるようになることが留学の意義だと明確に位置付けている。

4. 2. 言語習得に対する意識

言語習得に関する項目を挙げている学生は A、B、D の 3 名であった。学生 A はチューターの韓国人学生との交流を通じて、もっと韓国語を話したいという気持ちになり、コミュニケーションのために韓国語を学ぼうという意識が高まり、また韓国人から「韓国人みたい」と言われるほどに韓国語が上達した先輩に会ったことも刺激となったようである。学生 B も留学を通して、韓国語がわかるようになったと実感できる機会が何度かあり、より学習意欲が高まったと述べている。また、以前は韓国語より英語を身に付けたいと考え、韓国語は簡単なコミュニケーションができる程度でいいと思っていたが、生活する上でもっと必要だと強く思ったようである。学生 D は言語に関する項目が一つあるものの、重要度は 11 項目中最も低く、「おまけ」と述べていることからわかるように、留学に付随することであるという意識である。ただ、学生 D も生活に必要な最低限の韓国語能力は

必要だと感じ、もっと韓国語を頑張ろうという気持ちになったとも述べている。学生Cは言語に関する項目がない。学生Cはこの中で唯一の4年生で、在学中3つの語学研修に参加した経験を持つ。学生Cは、3年前の1年生の時に参加したカナダの英語研修を振り返って、「あの時はただ英語をしゃべれるようになりたいとか会話できるようになるのがかっこいいと思って申し込んだんですけど、ただ喋れるだけじゃ意味がない、考え方がしっかりしていないとだめだと今なら思う」と述べている。学生A、B、Dは1年生で在学中に韓国への長期留学も選択肢の一つとして考えており、より本格的に韓国語を学びたいという気持ちが強くなっている。同じ海外研修に参加しても、参加者が今までにどのような経験をして、何を期待するかで、参加者自身が感じる留学の成果も大きく異なっていることが窺える。

4. 3. 自分自身の成長の場

全員が留学を自分自身の成長の場であるとしてとらえている。どのような点で成長や変化があったか、共通する項目を見ていくと、一つは比較する視点を持つようになったことを成長や変化と捉えているようである。「視野が広がる（学生C）」「日本と比較できた（学生B、D）」「自分の良さ、欠点を再認識できる（学生C）」「自分が多数派から少数派になる（学生A）」さらに、社会や文化を相対的に見る視点を持つことで「日本の良さを再認識できる（学生C）」「日本文化を再認識する（学生D）」など、当たり前になっていた日本文化や日本での生活を見つめなおす機会であると認識していることがわかる。対人関係や積極性に関する成長についても述べられており、学生Bは現地の人に自分から話しかけるなど積極的に行動することが重要だと意識するようになり、学生Dも人との関わり方について、今までは人と距離を保つことがいいと思っていたのに、もっと積極的にコミュニケーションを取ったほうがいいと思うようになったことが大きな変化であると述べている。

4. 4. 不安について

3名が留学にともなう不安材料となる項目を挙げており、当然のことながらマイナスイメージとしている。学生AとBは特に単位について、「単位を取るのが大変（学生A）」「単位認定される教科数が少ないと思われる（学生B）」と項目として挙げている。これは二人とも韓国に交換留学中の先輩の話を聞いたためと推察されるが、二人はより長期の留学に興味を示しているものの、4年間で卒業したいという気持ちが強いため、単位取得の問題が留学を阻害する大きな障壁であると認識したようである。また仁済大学では寮費と食費が支給されるため、滞在費や生活費は格安ではあるものの、渡航費や保険料などさまざま

な経費がかかると考えている。池田 (2010) が海外留学前の学生に行った調査では、留学先での生活に対する強い不安を抱いているケースがあったが、今回の場合はもうすでに現地での生活がどのようなものか3週間経験しているため、留學生活に対する不安というよりもむしろ帰国後に自分が置かれているであろう状況に対する不安であることがわかった。留學を具体的に考えれば考えるほど、単位や留學費用の問題は避けて通れない課題となっているようである。

5. おわりに

本稿では、PAC 分析を用いて韓国短期研修に参加した4名の留學に対するイメージと意識の変化について検証した。グローバル化が進む中で、英語が世界の共通言語としてその重要度を増していく一方で、英語以外の言語を習得しようという動機づけが難しくなっている一面がある。参加者の中でも留學前は韓国語が「ほどほどに」できればよいと考えていた学生も複数いたようである。しかし実際にその国に行って生活することで、もっと学びたい、コミュニケーションがとれるようになりたいと強く思うようになっている。また他方では、言語習得が留學の第一義的な目的と捉えるのではなく、異文化体験こそが視野を広げ、人間的な成長につながる貴重な経験であると位置づけている学生もいた。留學の成果を語学力など比較的測りやすい指標で検証することも大切ではあるが、語学に限らず、どのような学問的・人間的な成長をもたらされたか様々な手法で検証することも重要であろう。また、今回の調査から、短期研修参加者がより長期の留學へ強い興味を持つようになったものの、単位やお金、就職など、より具体的で強い不安を抱えていることも明らかとなった。短期研修で高まった留學意欲を一過性のものとしないうちにも、学生が安心して留學できるよう継続した情報提供や留學支援体制の構築が必要であろう。

付記：本研究は平成24年～平成27年度科学研究費補助金(基盤研究(C)研究代表者：安龍洙 課題番号24520566)による研究成果の一部である。

参考文献：

足立恭則 (2010), 「大学学部課程における海外留學の教育的価値とカリキュラムにおける位置づけ」

『東洋英和女学院大学人文・社会科学論集』第28号, 77-91.

池田庸子 (2010), 「日本人学生の異文化観に関する事例研究 (1) -海外留學予定者の場合-」『茨

城大学留学生センター紀要』第8号, 43-53.

池田庸子 (2011), 「日本人学生の異文化観に関する事例研究 (2) - 海外留学経験により異文化観の変容 -」『茨城大学留学生センター紀要』第9号, 47-56.

木村啓子 (2011), 「短期海外研修プログラムの効果と役割」『ウェブマガジン留学交流』2011年12月号, Vol.9.

久野寛之 (2011), 「3週間の短期海外語学研修が大学生の英語能力に及ぼす効果について」『北海道文教大学論集』12, 127-145.

内藤哲雄 (1993), 「個人別態度構造の分析について」『人文科学論集』27 信州大学人文学部, 43-69.

内藤哲夫 (2002), 『PAC 分析実施法入門: 「個」を科学する新技法への招待 (改訂版)』ナカニシヤ出版

中川典子 (2009), 「短期海外語学研修における参加者の気づき-異文化理解教育の観点から-」『流通科学大学論集-人間・社会・自然編』第21巻第2号, 37-60.

松田康子 (2012), 「短期海外研修の成果と異議-学生の報告書とアンケート調査の結果から-」『名古屋文理大学紀要』第12号, 11-16.

リクルート (2011), 「大学進学者の留学意向」

http://www.recruit.jp/news_data/library/pdf/20110712_01.pdf#search='%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E9%80%B2%E5%AD%A6%E8%80%85%E3%81%AE%E7%95%99%E5%AD%A6%E6%84%8F%E5%90%91'